

編集後記

- 昨年、翔友 31 の校正を終り、印刷にかけた直後に牧野鐵五郎先輩の訃報を受けた。入院中であることは承知していたが、お見舞いは「もう少し元気になるまで待つて欲しい」という甥御様とのやりとりから、復帰を信じて疑わなかっただけに一瞬言葉を失った。次に来たのは深い喪失感だった。故人から直接ご指導を受けたのは、1965 年卒が最後であろう。大変厳しかったが、その分温かみのある教官であった。▲昭和の滑空界では、戦後の学連再発足に際し、関西支部を実現させた二本柱であった牧野伊兵衛・牧野鐵五郎は「両牧野」と呼ばれ、同志社を象徴する存在であった。そして永年、同志社はお二人の学生航空に対する考え方や、価値観を羅針盤にして進んで来た。正に「巨星墜ちる」としか言いようが無い。▲何時も航空部と翔友会を気にかけて、部員の活躍を願っておられただけに、不祥事の連続を知らずに逝かれたのがせめてもの救いであった。▲本号で追悼記事の特集しようとして、はたと気づいたのは、ご長命であったので、同期や教え子は殆どが泉下の客となって、原稿を集めようがないということだった。それだけに今頃は、多くの仲間や教え子達に囲まれて、「牧野さん、待つてましたよ!」「いや～待たせたなあ、スマンスマン」と賑やかに、楽しくやっておられるに違いない。
- ▲故人の「来年からは、君がやれ」の一言で第 10 号から本誌の編集を引継いで以来、毎号、お届けすると直ぐに丁寧な感謝の言葉と読後感をメールで頂いた。それを励みにして続けて来ただけに、これからは、何処にお送りすれば届くのか……。
- 「今の学生には無理ですよ～」とか「時代が違いますよ～」とか、若い OB と話していると、よく聞くフレーズである。私の時代とはそんなに学生の意識に差があるのだろうか？それなら、直接聞いてみようと思って記事にしたのが「私達の“思い”」である。全員が本音で応えてくれた。率直な感想は「何だ、大して変わらないよ」である。“もともと飛行機が好きだった”、“大学でしか出来ない部活を”と今も昔も同じ動機で入部し、自分の目標達成を目指して努力する中で悩み苦しみ、支え合う仲間の存在を有難く思っで大切にしている。▲違いがあるとすれば、部活、特に合宿に当たって、自分達独自の工夫や他校と異なる独創性が失われていると感じることである。▲批判を恐れずに論評を許してもらえば、何時の頃からか関西・東海の各校の部活が規格・均一化され、大学のカラーも無色になったように思う。安全性確保のために支部の指導者会議のようなところで決めたのであろうが、教官や上級生による試験や認定が必要な「係」や「作業」がやたらとあり、全「係」が揃わないと合宿が出来ないシステムになっている。指導する側は規制で縛るほど管理し易くなるが、その分学生側は、裁量範囲が狭まり工夫や独自性を発揮出来なくなる。一校で「係」を充足出来ないためか、複数校による合同合宿が常態化している。安全性の確保は全てに優先するが、大学スポーツとしての自主性や自由闊達な活動を阻害するようになっては本末転倒である。学生を信じ、彼らが自主的・能動的な部活や合宿に伸び伸びと取り組めるようなシステムを作ることが各校指導者の使命であり、義務であると思う。▲もう一つ今と違うところは、私達の頃は、必要だと思ったことは、誰にも頼らず、自分達で努力して手に入れた。それが機体であれ、練習場であれ。